

預金通貨と其の實體

小川 福太郎

序 言

今日の經濟社會に於て、一般的なる交換手段又は購買手段として廣く用ひられてゐる通貨又は貨幣には、鑄貨・政府紙幣・銀行券の如き諸形態の現金通貨の外に預金通貨又は預金貨幣 (deposit currency or deposit money) と稱せられるものが存在する。預金を最も早く貨幣と看做したのは、ダンバーであると言はれてゐるが、⁽¹⁾ 預金通貨なる名稱は主として小切手或は振替請求書を振出し得る基礎たる銀行の要求拂預金即ち當座預金に對して附せられたものであることは明かである。之れがために銀行貨幣 (bank money)、或は帳簿貨幣又は記帳貨幣 (Buchgeld; monnaie scripturale)、或は更に振替貨幣 (Giralgeld) といふ如き名稱が與へられてゐる。而して當座預金は今日に於ても預金通貨の主要なるものであるが、小切手或は振替請求書其他の支拂指圖書を振出し得る要求拂預金は必しも當座預金に限られてゐないから、振替郵便貯金や其他之れに類する預金も含め得るものである。只以下に於ては便宜上當座預金を中心として述べる。

儲て、現金通貨の中、銀行券に就いては之れを貨幣と見るか否かに關して會つて論争が盛んであつたが、最近に於ては、其の論争は未だ終結したとは言へないにしても、それを貨幣とする見解が支配的である。之れに對して預金通貨に就いては、之れを貨幣と見るか否かに就いて肯定説と否定説とが對立してゐるのみならず、肯定説の立場に於ても、何を以て預金通貨と見るか、即ち預金通貨の實體に就いて定説が無い。謂はゞ銀行券に就いてそれが貨幣なりや否やの論争は、今日では預金通貨の方へ移動した感があり、其の實體如何の問題と共に未だ意見の一致を見てゐないと言ふことが出来る。

此の小篇は、職能主義的立場に於て、先づ預金通貨の否定説中の有力なる説と見られるものに就いて其の論據を批評して、預金通貨の肯定し得る理由を述べ、次に預金通貨流通の根據に就いて少しく述べ、最後に預金通貨の實體如何に關する諸種の見解の中、最も妥當であると考へられるものは何れの説であるかを検討するため、此の實體の問題を主として取扱つたものである。

(1) 山崎覺次郎 若干の貨幣問題 二〇八頁。

一

預金通貨の肯定説と否定説との分岐する所以は、主としては貨幣本質觀の相違、或は貨幣の營む多くの職能の中最も重要なもの如何に就いての見解の相違であつて、特に預金通貨否定説は、或は金屬主義的立場に於て預金通貨は他財の價值測定の意味に於ける價值尺度の職能を營み得ざるが故に之れを否定する。或は同じく金屬主

義的立場に於て、或は名目主義的又は職能主義的立場に於ても、預金通貨は一般的交換手段たる職能を営み得ざることを其の論據として否定せられる。尙其他に、預金通貨は法定支拂手段でないが故に、或は貨幣請求權に過ぎないが故に、貨幣に非ずとする見解も存する。斯くの如く種々の論據が擧げられるが、今此處には貨幣の本質觀の相違より見たる肯定否定兩説の論據に就いて一々詳述することを省畧する。(註一) 只だ否定説の中に於て最も有力と思はれるものは、貨幣の営む最も重要な職能と考へらるゝ一般的交換手段たることが、預金通貨に就いては認められ得ないといふ説である。即ちそれは其の否定の主たる理由を、預金通貨は之れを小切手と見る場合に於ては一般的授受性を缺き、又之れを預金と見る場合に於ては、無體物であるから讓渡性を缺くといふ點に置くものである。而して我國に於て否定説を採る學者が、預金通貨を貨幣に非ずとするのも主として之等の點に基くものである。(註二) そこで以下に於ては、之等の否定説の主たる理由に對して預金通貨が貨幣と見られ得る理由を先づ述べ、尙預金通貨は貨幣請求權に過ぎないとする見解に就いても後に述べることをする。

(註一) 貨幣の本質觀より見たる肯定説及び否定説の詳細なる研究に就いては、中谷實氏の「新金融理論」特に一七一四〇頁參照。

(註二) 例へば、牧野博士は「所謂預金貨幣説を肯定しかねる第一の理由は、貨幣の範圍を無體物にまで及ぼすことは、貨幣の本性に反するからである。多くの預金貨幣論者が、貨幣たるの必要條件は、一般的流通性にあることを認めながら、而して此の性能あるが爲に、貨幣は財貨交換の媒介具たるの職能を全うすることが出來ると稱しながら、銀行預金のやうに無條件に流通することの出來ない無形體を貨幣として承認することは、如何にも了解し得ないことである。」と言

はれる。(「貨幣學の實證的研究」一二三頁)。尙、同書一二五頁—一二八頁。高垣寅次郎「銀行論」六三頁參照。

二

私は、貨幣の本質は貨幣としての職能の中に求むべきものであるといふ立場に於て、貨幣の営む多くの職能の中に於ても、財貨を獲得或は購買し得る手段たる意味に於ける一般的交換手段たる職能が、貨幣の最も根本的或は本質的な職能であると思ふ。貨幣は此の職能を営むが故に、價值を持ち一般的購買力となり得るものであると考へる。尙、之れに對して一般的支拂手段たることが貨幣の根本的職能なりとする見解があり、一般的支拂手段と言ふ表現に依つて、物との交換の場合と資本の移轉・貸借・返済の如き場合とに於ける貨幣の職能を包括して示すことが妥當であると見られてゐる。⁽¹⁾之れに就ては私は貨幣が一般的交換手段たる職能を営むが故に、一般的支拂手段たる職能をも營み得ると考へる。⁽²⁾従つて後述する所に於て、預金通貨が支拂決済の手段と成ると言ふことがあつても、それは一般交換手段たる職能よりも根本的或はそれと對等的な職能と見てゐないのである。

偕て一般的交換手段たる職能が貨幣の本質的職能であるといふ場合に、其の一般的といふ意味を明かにせねばならぬ。それは又不特定のとも言ひ得るものであつて、先づ第一に貨幣を受領する者が一般的不特定のであり、何人も之れを受領し、貨幣の所有者は何人に對しても之れを譲渡し得ること、次には貨幣に依つて購買せられ或は之れと交換せられる財貨が一般的不特定のであり、如何なる物と雖も購買或は交換せられ得ること、更に貨幣

は其の流通の時及び場所に於て一般的不特定のであり、如何なる時・處に於ても受領し譲渡せられることを意味してゐる。約言すれば人・物・時・處に對しての一般性或は不特定性である。^(a) 然し、斯くの如く一般性・不特定性を説明しても、それは絶對的のものでは無く、與へられたる範圍内に於て發揮せられるものである。^(a) 即ち場所に關する一般性も、或は國境の内部に於て或は市場の存する範圍に於てゞあり、物に關する一般性も財貨が手に入れ得る範圍に於てゞあり、人に就いての一般性も凡ての階級或は職業を通じてといふ意味に於てではなくして、慣習の相違の制約を受けることを認めなければならぬと思ふ。^(a) 従つて「小切手と雖も、これを以て取引する慣習の範圍について云へば一般的に授受せられる」と言ひ得るものである。

右の如く、貨幣の人・物・時・處に關する一般性が絶對的のものでは無く、或る範圍内に於てのものであることが承認を得るならば、預金通貨が、それを小切手とする場合に於て、假令一部の人々に依つて受領が拒まれ、或は現金通貨が欲せられることがあつても、之れを以て今日の經濟社會に於ける取引の大部分が小切手に依つて決済せられて居り、又巨額の取引に於ては現金通貨よりも小切手の方が安全且つ便利なるものとして好んで授受せられてゐるといふ事實をの蔽ふことは出来ないと思ふ。又預金通貨を當座預金とする場合に於てもそれは無形のものであるから、移轉性或は流通性を缺くといふのは、形態に捉はれたる考へ方であつて、帳簿上の數字であつても、「其の實在は疑なく、其の絶えず増減移轉することが、明かに之を立證する」。^(a) 従つて之れを一般的購買力の所在の指標として、社會の多數の人々が意識して確認してゐるものと考へ得られるのである。^(a)

尙、貨幣の流通といふことを以て、それが人の手から手へ移されなければ、流通するとは言へぬといふ様に狭く解する必要はないと思ふ。斯かる解釋は、小切手の方を預金通貨と見、當座預金を預金通貨とせざる論者に依つても、自説を辯護するために時として採られるのであるが、流通とは長く一人に屬せず頻に所有者を變へることであるとして廣く解すべきである。従つて手交貨幣 (Handgeld; monnaie manuelle) の流通と同様に、記帳貨幣と雖も、帳簿上の數字が一般的購買力の所在の指標として見られて居り、其の數字の振替に依つて人から人への移轉が行はれる以上、之れを流通と見得るものである。

- (1) 小島昌太郎 金融論 三〇四頁。
- (2) 高田保馬 經濟學新講第三卷、五六頁參照。中谷實 新金融理論 二五頁參照。
- (3) 高田保馬 前掲書 七四頁參照。L. Baudin, La monnaie et la formation des prix, 1936, P. 318.
- (4) L. Baudin, Ibid. P. 318—319.
- (5) 高田保馬 前掲書 七六—七七頁參照。L. Baudin, Ibid. P. 319 參照。
- (6) 高田保馬 前掲書 七七頁。
- (7) 井上準之助 戦後に於ける我國の經濟及金融 一二二頁參照。
- (8) 山崎覺次郎 改訂貨幣讀本、八頁。
- (9) 高田保馬 前掲書 五一頁參照。
- (10) 山崎覺次郎 前掲書 一五頁。

預金通貨と其の實體

三

上述の如き解釋及び理由に依つて、預金通貨が今日の經濟社會に於て一般的なる授受性及び讓渡性を持つことが認められるならば、次には此の一般的授受性及び一般的讓渡性の生ずる原因は何處に求めらるべきであるか。此の原因を、金屬的素材の價值と見るか、法制の力と見るか、社會的信認と見るか。或は又、其の社會的信認といふことも、金屬的素材の價值或は法制の力を主たる根據とするか、或は之等のものに殆んど依存せざるものと見るか。之等の見方の相違に依り、貨幣學説は分岐し、貨幣として認められるものの範圍は異らざるを得ないであらう。

預金通貨に就いて考へるに、之れを當座預金或は小切手の何れと見るにしても、それは金屬を素材とせず又本位貨幣との兌換の約束もなく、又法制に依つて強制通用力も與へられてゐない。只現金通貨の欲せられる場合に今日に於ては主として銀行券を以て引渡されてゐる。そこで其の銀行券が兌換の可能なるものであるならば、預金通貨にも本位貨幣に迄換へ得る道が通じて居り、其の流通性は幾分本位貨幣に依存する處があるとも考へられ得るであらう。然し兌換の停止せられてゐる時に於ては其の依存關係は斷たれてゐる。しかも今日大部分の取引が預金通貨に依つて決済せられ、それが現金通貨にての引渡を要求される部分は小部分に過ぎないのである。斯くの如き状態を見るならば、預金通貨の一般的なる授受性及び讓渡性の生ずる原因は、金屬的素材や法制の力に

殆んど俟たざる社會的信認であると言ふことが出来るであらう。而して其の社會的信認とは、之れを別の言葉で表現すれば、貨幣が一般に、一般的受領性或は流通性を持つに至る最大の原因は、「其の流通に對する世人の信用」或は「一般的受領の信賴又は期待」であると言はれてゐるものに相當する。然し、尙少しく考へると、預金通貨に對する社會的信認を成立せしめるに就いて、其の主たる保證となつてゐるものは、預金振替及び手形交換の制度並びに最後の決済銀行としての中央銀行の存在といふ組織の成立と、其の故障無き運行であると言ひ得ないであらうか。而して此の組織の故障無き運行に依つて、預金通貨の一般的授受性及び譲渡性の保證が與へられ、其の保證の確實なることが一般の銀行に對する信認を成立せしめるものであり、此の銀行に對する信認が、預金通貨流通の根據としての社會的信認の重要な構成要素となつてゐると考へられるのである。

(1) 山崎覺次郎 前掲書 一六頁。

(2) 高田保馬 前掲書 七五頁。

四

預金通貨の實體に就いては、最初に述べたるが如く其の肯定説の立場に於ても定説が無く、預金通貨と見るべきものは當座預金そのものか、或は小切手又は振替請求書の如き支拂指圖書を指すか、或は又當座預金と小切手とを合せて、或は又兩者を共に通貨と見るか、問題となる。此の問題に就いて我國の學者の見解は多岐であつ

て、當座預金を預金通貨と見るもの（此の見解を採る學者は比較的が多い）⁽¹⁾、小切手を預金通貨とするもの⁽²⁾、當座預金と小切手とを共に貨幣と見るもの⁽³⁾、といふが如くに諸説が存し、尙他方に於ては預金通貨を當座預金其他の要求拂預金に限ること無く、如何なる種類の預金にても、「銀行預金が預金のまゝで移譲せらるることにより、支拂決済の手段となる場合に於ける、その預金」をば預金通貨とするといふ見解が存する⁽⁴⁾。

以上の如く預金通貨の實體に關しては數多の見解が存するのであるが、其中、最後のもの即ち預金通貨を當座預金其他の要求拂預金に限らず、如何なる種類の預金にても、それが其儘移譲せらるることに依り支拂決済の手段となる場合に於ける其の預金を、預金通貨とするといふ小島博士の見解は、二つの點に於て他の諸説に比して餘程異なる解釋となつてゐるので、先づ之れに就いて述べる。其の一つは當座預金其他の要求拂預金のみならず如何なる預金にても、預金通貨となり得るといふ擴張的解釋であり、今一つは如何なる種類の預金でも其儘移譲せられることに依り支拂決済の手段として働いてゐる場合に於てのみ、預金通貨と見るといふ制限的解釋である。而して注意すべきことは、此の制限的解釋のために、預金が預金の儘で銀行に待機して居つて支拂決済に働かない間は預金通貨とは言はれずして、之れに潜在通貨なる名稱が與へられ、此の潜在通貨が現金通貨及び預金通貨の母體と見られてゐる。而して此の母體から預金が預金の儘で移譲せられて所有者を轉換することに依り、支拂決済手段として働く間に就いてのみ、預金通貨といふ名稱が與へられてゐるのである。

前述の二點の中、預金通貨の制限的解釋に就いては、其の意味の預金通貨と一方の潜在通貨とを概念上區別す

ることが、金融現象を理解する上に於て、更に通貨と物價との關係を見る場合等に於て意義を持つことが認められるが、私は、預金通貨を以て、從來の用法の如くに解釋し、當座預金が支拂決済の手段と成つた場合もそれに成らなかつた場合をも含めて、預金通貨といふ名稱を用ひることにする。

次に擴張的解釋に就いては、要求拂預金を初め其他如何なる種類の預金にても、其の儘移譲せられることに依り支拂決済の手段となることは、事實上有ることとして認め得られることである。従つて「定期預金の如きものも、その期限の到來に當り、預金者が銀行に對して、それを以て例へば株金の拂込に充しんとするならば、やはり預金通貨として働くことになる」といふことは、否定し得ないが、定期預金の如きは時として前掲の如く支拂決済の手段に用ひられることがあるにしても、一般の人々が定期預金を支拂決済の手段と認めて、之れを預金の儘で其の手段に用ふることを本來の目的として、預金としてゐないと考へられる。同様のことが特別當座預金や普通貯金の如き要求拂預金に就いても言ひ得るであらう。之れに反して當座預金は支拂決済を行はしめることを本來の目的として設けられた預金であると言ふことが出来るから、私は銀行預金の種類の中では、當座預金のみに預金通貨の名稱を保留するのが妥當であらうと思ふ。而して當座預金勘定を有する者が、同じ銀行に定期預金或は又特別當座預金を有してゐるならば、其の満期に際し或は又必要に應じて、之等を當座預金に振替へることに依つて、間接的に支拂決済の目的に充てることが出来るが、定期預金或は特別當座預金として存置せしめてゐる限りは、普通は、之れを支拂決済の手段とすることを目的としてゐないものと考へる。

尙、小島博士が預金通貨と見られるものは前述の如くであるが、假りに其の解釋が、預金通貨と見るべきものは當座預金か小切手かといふ點に於て岐れてゐる二つの説の中の何れに近いかを見るならば、それは當座預金説に近いと言ひ得るであらう。此のことは既述の如く、「銀行預金が、預金のまゝで、移譲せらるることにより、支拂決済の手段となる場合に於ける、その預金」が預金通貨であると見られてゐること、一方には小切手なるものが元來、「その使用の最初より、預金を預金のまゝで、通貨として通用せしむる道具として用ひられたのである」⁽⁸⁾と言はれてゐることに依つても明かであり、更に又、小切手に依つて「預金が預金のまゝで支拂の決済たる役目、すなはち通貨たる役目をつくすことになるのであり……」⁽⁹⁾と言はれてゐることに依つても明かである。此の考へ方に就いては、尙後に述べることにする。

- (1) 中 谷 實 前掲書 四五頁。橋爪明男 貨幣論 一九四頁。田中金司 貨幣論、銀行論 一三頁。
- (2) 土方成美 經濟學總論 二七七頁。
- (3) 山崎覺次郎 前掲書 一〇頁。
- (4) 小島昌太郎 前掲書 三二五頁。
- (5) 小島昌太郎 前掲書 三三〇頁—三三一頁。
- (6) 小島昌太郎 前掲書 三二八頁。
- (7) 中 谷 實 前掲書 五四頁參照。
- (8) 小島昌太郎 前掲書 三二六—三二七頁。
- (9) 小島昌太郎 前掲書 三二七頁。

五

前掲の小島博士の見解を除けば、先に掲げたる諸説は、預金通貨肯定説の立場に於て、當座預金を預金通貨と見るか、或は小切手を預金通貨と見るか、或は又兩者を合して預金通貨と見るか、或は更に兩者を共に通貨と見るかの四つの見方の中の何れかである。今、之等の見方の中、先づ、當座預金或は小切手の何れか一方を預金通貨と見る説に於て、他方の立場を排する理由を見ることとする。

第一に、當座預金よりも小切手を以て預金通貨と見る論者が當座預金説を排する理由の主なるものは、(一)預金には譲渡性が無いが、小切手には譲渡性がある。(二)預金は抽象的の數字であつて、一般的購買力を有し得ない。(三)當座貸越約定の範圍内に於て振出される所謂過振小切手は、當座預金説に於ては説明し得ないといふことが擧げられる。(四)之等の理由は亦、預金通貨否定説の論據であることを注意すべきである。

次に小切手よりも當座預金を以て預金通貨と見る論者が小切手説を排する理由の主なるものは、當座預金を以て一般的購買力の所在を示す指標と見るがために、小切手は其の移轉の用具又は手段或は支拂命令書と見るべきであるといふ見解が比較的多いが、尙其他の理由としては、「小切手を以て預金通貨と見る時には預金通貨の數量及び其の流通速度といふ概念が稍々不明確となる」といふことが擧げられてゐる。

右の如く預金通貨を當座預金或は小切手の何れか一方であるとする時、何れの側に於ても他方の説に満足し得

ざる若干の反對理由が擧げられるのである。

そこで先づ一應當座預金説の立場を採り、此説が小切手説の反駁に耐へ得るかを見ることとする。

小切手説を採る論者が當座預金説を排する前掲の三理由の中、(一)預金には譲渡性が無い、(二)預金は抽象的數字であつて一般的購買力を持たぬといふ點に就いては、私は既に預金通貨否定説に對する批評の節に於て、其の首肯し難いことを述べたのである。そこで残るところの、當座貸越約定の場合の過振小切手を如何に見るかに就いて述べなければならぬが、之れに就いては當座預金説を採る論者に依つて其の説明が與へられてゐるので、先づそれを次に掲げることとする。即ち或は「當座貸越の豫約に従つて現實に一定額の借入をなし、かくて創設された當座預金に對して小切手を振出すものである。たゞ銀行の記帳手續の上では省略が行はれる……」⁽³⁾といふ説明があり、又「過振小切手は當座貸越限度内に於て預金と無關係に振出されしものと見すに、斯かる小切手が振出されたる瞬間に小切手金額だけの預金が成立し此の預金に對して振出されたものと見る事が出来る」⁽⁴⁾といふ説明が與へられてゐるが、双方共に一應預金が成立したものと解する點に於て同様である。

私は此の過振小切手の説明が出来なければ、之れがために、當座預金を預金通貨と見る説が其の否定説に依つて全く覆されるといふ程、重大なるものとは考へてゐない。然し前掲の説明の如く、未だ預金が成立してゐないのに、一應預金が成立したと見ることも無理であると思ふ。

私は過振小切手に就いて次の如く解釋する。當座貸越契約は銀行と當座預金者との間の特殊の契約であつて、

其の契約に基き貸越限度内に於て過振小切手金額だけの通貨が造出せられ、それと同時に預金者の同額の債務が確定するものである。それ故に過振小切手は當座預金の存在を前提として振出される小切手と異り、預金の存在といふ段階を経ずして生じたものである。従つて此の過振小切手は、小切手を通貨と見ることに依つて説明が出来るのではないかと思ふ。然し斯くの如く小切手を通貨と見ると、當座預金を預金通貨と見て小切手は其の移轉の用具又は手段と見る立場と相反する結果となる。

そこで、次には當座預金説に於て、小切手が其の移轉の用具又は手段と見られてゐることが妥當であるかを考へなければならぬが、之れを考へるに先ち尙若干述べなければならぬので、今此處では述べない。

此處に附記すべきことは、當座預金と小切手とを合して預金通貨と見るといふ考へ方に就いてある。此の見解は結局に於て、或は當座預金は移轉性の無いものであるから、之れを動かすものは小切手であるといふ解釋の下に、小切手を通貨と見る説か、或は又、當座預金を預金通貨と見て小切手を其の移轉の手段と見る説か、其の何れかに歸着するものではないかと思ふ。

- (1) 中谷實 前掲書 四八一四九頁參照。
- (2) 中谷實 前掲書 四六一四七頁。
- (3) 田中金司 前掲書 一四頁。
- (4) 中谷實 前掲書 五一頁。

預金通貨と其の實體

(5) 高田保馬 前掲書 一七五頁參照。

六

凡そ、預金通貨の實體を當座預金と見るか小切手と見るか、或は此の兩者を合して、或は又兩者共に通貨と見るかの問題は、有力なる學者の間に於ても考へ方の變化があつて、デリケートなる問題である。例へば、高田博士は以前には、貨幣と見るべきは當座預金ではなくして小切手であると考へられたのであるが、後には「貨幣が社會の移動財流に對する移動的參與能力の所在の指標であると見るが故に、何が貨幣であるかは、社會意識が何をかゝる指標と見てゐるかといふことに歸着する……」との考へに基き、「此の指標として見らるべきものは今のところ、記帳の數字ではないかと思ふ。この意味に於て預金を貨幣と見ながら論を進めたい」⁽¹⁾と述べられてゐる。

然し私は、博士が其の舊稿の一節として述べられてゐる次の箇所は、當座預金説を採る者が考慮せねばならぬ點であると考えへる。

「若し、預金のみが貨幣であるとしよう。それを振りあてに發行せられたる小切手がAよりBCDE等へ輾轉として流通する。而も帳簿の記號は改まらず、Aの預金として記入せられてゐる。此際かの參與能力は移轉してゐない筈である。小切手を貨幣と見ることによりて、そのAよりEへの動きを知ることが出来る」⁽²⁾

前掲の如く小切手が流通する限りに於ては貨幣と見られ得ることを認めながら、預金を貨幣と見るものとしてシユムベエタアが擧げられてゐる⁽³⁾が、尙之れと同様の見解であると想像せられるものとして、次にペトリツデの言ふところを掲げる。

彼れは、原則としては、當座預金説を採るところのアンシヲウの意見⁽⁴⁾に同意したる後に、次の如く述べてゐる。「一般的には、流通するものは小切手ではなくして、一つの勘定より他の勘定に移轉せられる預金である。然し乍ら、限られたる範圍に於ては、實際、小切手の固有の流通が等しく存する。小切手が裏書に依つて次々の權利者に譲渡された期間の間に、一つの勘定に振込まれるために銀行に歸るに先立つて、債權譲渡の方法に依つて若干數の債權の譲渡と債務の消滅とが有つた。其れ故に、小切手は比較的短い期間ではあるが流通した。其れ故に帳簿貨幣に於ては、先づ第一に預金の流通といふ主たる流通があり、預金が振替の方法に依り或は小切手の仲介に依つて、勘定から勘定へ移轉せられる。而して一方には、小切手が數人の所持人に次々に譲渡された時に生じたる小切手の固有の流通がある。各々の小切手個別的には、此の派生的流通は恐らく餘り重要なものではない。然し小切手の全體に取つては、此の流通は或る量の支拂を現はす、其の支拂は見積が非常に困難であり且又銀行の記帳の中には勿論見出されないものである」⁽⁵⁾

ペトリツデの述べるが如く、小切手が轉々流通する場合が事實上有ることは充分認められることである。然し彼の見解は、小切手は原則として當座預金移轉の手段又は道具であるといふ考へ方に拘束されてゐると言ひ得る

であらう。此の考へ方が根本にあるため、例外的に小切手をも通貨と認め得る場合があるといふに過ぎない。従つて此の見方よりすれば、小切手の中に、單に當座預金移轉の手段或は要具になつたに過ぎない小切手——従つてそれは通貨とは見られてゐない——と、一方には通貨とした働いた小切手とを區別して見ることになる。(註二)然し斯かる區別は理論上全く無用のことと考へられる。

- (1) 高田保馬 前掲書 一七五頁。
- (2) 高田保馬 前掲書 一七五頁。
- (3) 高田保馬 前掲書 一九七頁。
- (4) M. Ansiaux, *Traité d'économie politique*, Tome 2, 1923, P.P. 264—265.
- (5) E. A. Petrizi, *La monnaie scripturale*, 1934, P. 37 note.

(註二) 勿論右の如き區別は出来ないことは無い。即ちそれは振出されたる小切手が銀行に戻つて後、裏書の數に依つて區別が出来る。然し之れは今問題としてゐることは無關係のことである。而して其の裏書の數は、當座預金の流通速度を正確に測定する場合には小切手の轉回度數として數へられねばならぬものである。

七

上述の如く考へて來ると、預金通貨と見るべきものは、當座預金か小切手かの何れか一方に限らずして、兩者を共に通貨と見ることが許されないかといふことと、問題となし得るであらう。

そこで私は此處に、山崎博士が從來の考へ方を變へて、當座預金と小切手とを共に貨幣と見るといふ考へ方に移られたことに就いて見ることとする。博士は「倉庫證券が倉庫に在る貨物、例へば米を代表して流通する如く、小切手は銀行の金庫内又は帳簿上に存する預金を代表して之れを移轉する用具と見るべきであるから、小切手は貨幣でない」と云ふ見解を從來有つて居つたが、今や本文の如き解釋を取ることにした。倉庫證券は如何なる場合でも米の如き貨物自體でないから、之を同一視することは出来ない。然るに預金と小切手とは、本文に述べた理由で、何れも貨幣と看做すのが妥當であらう⁽¹⁾と言はれ、其の本文に於ては、「世上に流通する銀行券と其の準備として銀行に保管せられる金貨とは、後に述べるように、其職能を異にするが、共に貨幣である。之と同じ理由で、預金と之を基礎として振出される小切手とは共に貨幣であると云はねばならぬ⁽²⁾」と述べられてゐる。

右の引用文に於ては博士の説明は簡單であるので、私は、博士が預金と小切手とを共に貨幣とせられる理由の説明を、更に博士の著書より求めて、私の解釋したところに従つて次に述べることにする。

恰も金貨が銀行券の兌換準備となつてゐるが如く⁽³⁾（而して兌換準備の必要なるは、金をして國際的職能を發揮せしめることが、其主たるものである⁽⁴⁾）、小切手振出の基礎たる當座預金は、小切手の支拂準備となつてゐる。斯くの如く兌換準備又は支拂準備となることは、換言すれば或種類の貨幣が他種の貨幣の基礎となることであり、之れも貨幣の職能の一つである。⁽⁵⁾「而して此等の準備に供せられる貨幣は外觀上、……何等の活動をなさぬやうであるが、實際は大いに之と異なる⁽⁶⁾。」ところで、銀行券も當座預金も經濟上の事實に基づいて貨幣と

看做すべきものである。(1) 一方、小切手は、貨幣と看做し得る預金を代表するものであるから、之れを貨幣と看做し得るものである。之れを以て、預金を移轉する用具と見るべきではない。他方に於て、倉庫證券も貨物を代表して流通するが、之れは貨物そのものと同一視し得ないものである。

大體、以上の如き理由に依つて、博士は、預金と之れを基礎として振出される小切手とを共に貨幣と見られたものであらうと思ふ。

此の山崎博士の新見解は、今迄述べ來つたところの、預金通貨は當座預金か小切手かの何れか一方に限るべきであるとの考へ方及び當座預金説を原則とし乍ら、尙例外的に小切手にも通貨として作用する場合を認めるといふ見解に比べて、勝つて居り、それ等の諸説の場合に存したる若干の矛盾は之れに依つて取除かれるものと私は考へる。即ち當座預金説を採る場合に、過振小切手の説明が充分に出來ないことを救ひ得ると共に、小切手が轉々流通する場合の存することも何等の問題とならないのである。

更に、一方の小切手説を採る場合に、預金通貨の數量及び流通速度といふ概念が稍々不明確になるといふことが擧げられてゐる點に就いても、(2) 其の概念が不明確となる處は無いのである。只だ當座預金説に於て小切手が其の移轉の手段又は用具と見られたものが、通貨と見られるに至つたといふ差があるのみである。(然し、預金通貨の流通速度の概念乃至構想に就いては、尙問題が存し得ると思はれるが、此點に就いては今觸れない)。

何故に小切手を當座預金の移轉の手段又は用具と見ずして、それを代表するものとして通貨と見るかの理由

は、既に前述せるところに於て示されてゐるのであるが、尙次に少しく述べることにする。

元來、小切手は其の形式上の文言或は法律上より見たる解釋としては、其券面記載の金額の支拂を銀行に委託するものとなつて居り、之れが爲に貨幣の請求權或は貨幣の代用物であるとして、貨幣に非ずとする見解がある。然し形式上或は法律上の解釋としては正にそうであつても、一方經濟上に於ては之れが流通してゐる限り貨幣の職能を營んでゐると言ふことが出来る。従つて形式上貨幣請求權を現はすものであるにしても、それが貨幣化するに至る。之れは銀行券の場合でも當座預金の場合でも同様である。（反之、米を代表する倉庫證券や砂糖の配給切符の如きものは、請求權を現はすものであるといふ點に於ては同様であるが、之れを以て米或は砂糖そのものと同一視し得ないものである）。其れ故に職能主義の立場に立つ以上、小切手を以つて當座預金を代表するものとして之れを通貨と見るべきであらう。然るに小切手を當座預金の移轉の用具又は手段と見るのみでは、假令、之れに依つて、小切手は現金通貨の支拂を要求するために用ひられてゐないといふことを示し得るにしても、移轉の用具と見る以上は、それは恰も運搬用の容器の如きものであつて、通貨として見られてゐないといふことになる。（註二）勿論、小切手の流通期間は、法律上呈示期間の制限があるために、銀行券のそれに比べて短く、又流通の範圍に於ても銀行券よりも狭い（強制通用力なきこと、金額の端數、分割に不便なること、使用の習慣の程度の差等に因る。又時として不渡小切手の出る處れあることも關係する）が、兎に角流通する限りに於ては通貨としての働きをなした點に於て、銀行券と變りはない（小切手が不渡となつた場合は、鑄貨・銀行

券に就いて偽造や贋造が発見された場合と同様に、通貨としては無効と成る。

以上の如き理由に依つて、當座預金を基礎として振出される小切手は、當座預金を代表して通貨として流通するが故に、兩者共に通貨と見ることが出来る。従つて當座預金を預金通貨と稱するならば、小切手を小切手通貨と言ふべきであらう。

ところで、右の如き解釋に對しては、問題となり得る點が残存する。それは、右の如き解釋は、預金通貨として當座預金と小切手とを二重に貨幣として數へるものであつて、之れは許されないとの意見の存することである。⁽⁹⁾私は之れは主として通貨と物價との關係に就いて起る問題と考へるが、此點に就いて次に述べる。

小切手が振出されて流通してゐる間は、之れに代表せられてゐる當座預金は未だ動いてゐない。預金の振替に依つて預金が動くのは、小切手が銀行に戻つて流通を止めた時である。従つて物價との關係に於ては、小切手の流通額（小切手の金額に、それが支拂決済手段として用ひられた轉回度數を乗じたるもの）のみが購買力として作用し得る。此の意味に於て、振出された小切手のお金とそれに代表せられる當座預金額とを二重に購買力として作用したものととして數へることは出来ないであらう。然らば一方に於て、小切手に代表せられてゐる當座預金は其の間購買力として働かぬ以上、之れを通貨ではないとして通貨の中から除去し得るかと言へば、それを認めることは出来ないと考へる。何となれば代表せられてゐる當座預金は、元來小切手の振出される基礎として、又必要に應じて現金が引出される源泉として、山崎博士の言はれる支拂準備たる職能を營んでゐる。従つてそれは決し

て活動を全く中止したものではない。只小切手が流通してゐる間は、之れに代表せられてゐる預金は購買力として働いてゐないと言ひ得るのみである。

尚、右に述べたところと關聯して、活動を中止してゐる貨幣は貨幣と見られぬといふ考へ方が時として存するのであるが、それに就いて、私は退藏せられてゐる貨幣も、それを全く流通せしめることを斷念した様な場合（例へば博物館の蒐集の目的物となつた場合）を除いては、矢張貨幣であると見るものである。従つて小切手が流通してゐる間はそれと當座預金とを二重に貨幣として見ることになるのであるが、之れは二重になつても差支へないと思はれる。斯かる二重關係は、正貨準備と其れを基礎として發行せられたる銀行券との間に於ても、亦銀行券を以て支拂準備とする場合にそれと預金との間に於ても存するものである。只小切手は他の諸形態の通貨に比べて、通貨として持續的に流通することが最も短いだけ、流通を止めて消滅することも最も早いものである。

- (1) 山崎覺次郎 改訂貨幣讀本 一一—一二頁。
- (2) 山崎覺次郎 前掲書 一〇頁。
- (3) 同 書 二六頁。
- (4) 山崎覺次郎 貨幣問題雜觀 一三〇—一三一頁。
- (5) 山崎覺次郎 改訂貨幣讀本 二五頁。
- (6) 同 書 二六頁。
- (7) 同 書 八一—一〇頁。

預金通貨と其の實體

(8) 中谷 實 前掲書 四六—四七頁參照。

(9) 高田保馬 前掲書 一四一頁。一九六頁。

(註一) 小島博士は、小切手なるものは、形式上に於ては、當座預金者が銀行に對して其の券面記載の金額の現金支拂を委託する書面になつてゐるが、元來はイギリスに於て個人銀行が、英蘭銀行銀行券の通貨としての優越の地位を奪はんとするために、「その印刷形式によるものを使用し初めたことにより、一般に普及するに至つたものであるから、その使用の最初より、預金を預金のまゝで、通貨として通用せしむるの道具として用ひられたのである」と言はれてゐる（小島昌太郎 前掲書三二六—三二七頁）。之れに就いて、私は次の如く考へる。博士の言はれるが如く、小切手は形式上現金の支拂を求める書面となつて居る、従つて現金引出の要求がある以上、銀行は勿論之れに應じなければならぬのである。然し元來、小切手が考へ出されたのは、當座預金の儘で移轉せしめる道具としてといふよりも、寧ろ銀行券と同様に通貨の如くに使用させて、小切手を流通せしめんとするためではなかつたかと思ふものである。

尙、小島博士は、我國の銀行的用語として「現金」といふ言葉が甚だ曖昧である一例として、翌日の交換に於て入金せられる小切手を現金と見做してゐることを、擧げられてゐる。之れに就いては、其他の例と共に（前掲書 三三四—三五頁參照）、私は博士の注意せられる如く、「銀行的用語に於ては、現金なる言葉は、甚だ廣く用ひらるゝことがあるから、吾々が、銀行に於て作成せらるゝ諸統計を、利用する場合には、この點について、相當の注意を拂はなければ、觀察を誤ることとなるであらう」といふことを尊重するものであり、狹義の現金通貨と當座預金及び小切手との區別をする必要があると思ふものである。只だ、私は翌日の手形交換所に持出される小切手を受入銀行が現金と看做し、又簿記に於て受入小切手を現金と看做して記帳するといふ習慣が行はれてゐることは、當座預金を代表するものとして小切手が通貨として見られてゐることを物語るものではないかと思ふ。而して此點は、預金通貨否定論者の考ふべき點と思ふ。

ものである。

結 言

以上、私は最初に序言に於て述べたるが如き順序に於て、預金通貨の有力なる否定説を批評し、預金通貨肯定の理由及び其の流通の根據を述べたる後、其の實體に關する問題に入つたのである。而して之れに關する諸種の見解を検討したる結果、預金通貨の實體を當座預金か小切手かの何れかの一方に限る説に於ても、又其の實體を當座預金と見、從つて小切手を其の移轉の手段と見乍ら、尙或る場合には小切手を通貨と認める説に於ても、反駁せらるべき點が若干存することを知つたのである。そこで其等の點が如何にして除かれ、又如何に説明すべきかを考へたる結果、結局殘されてゐる考へ方としては、當座預金と小切手とを共に通貨と見る外は無いついふ方向に進んだのである。然し乍ら此の見方を採る時に於て、問題として起り得るものが若干豫想せられるが故に、之等の問題に就いて私の解釋を最後に述べたものである。斯くして、從來預金通貨を當座預金か小切手かの何れか一方に限る時に生ずる矛盾は殆んど取除かれたのでは無いかと思ふ。

然し或は尙、反對論の起る餘地及び私が見落してゐる點があるかも知れず、之等の點に就いては教示を仰ぎたいと思つてゐる。又私の説述に於て不充分に見える點があると思はれる。特に貨幣の本質的職能と其他の諸職能との關係、貨幣と信用との關係、貨幣と見るべきもの、範圍、預金通貨の流通速度等觸れるべくして、述べなかつた事柄も存するのであるが、此處で一先づ打切ることとする。